

# 館山支部だより

## 令和元年11月号 (2019.11.30 通巻95号)

<支部連絡窓口>  
千葉県隊友会館山支部  
事務局(代表)川村 巖  
Tel 0470-22-0230



<館山商工会議所に掲げられた横幕>

一連の超大型台風・豪雨による未曾有の被害の復旧支援等のため、実に多くの自衛隊災害派遣部隊が東奔西走、活動に従事しております。この館山地域でこれだけ多くの自衛隊の部隊を、しかも長期にわたって目にしたのは前代未聞のことと言ってもよいでしょう。  
国民・県民・市民のため、日々黙々と任務に従事される自衛隊部隊・隊員に改めて深甚なる感謝の意を表する次第です。 <支部長>

### <点描・市民の目に映った自衛隊災害派遣部隊の活動>

房日紙の読者コーナーに、任務を終えて撤収する災害派遣部隊を感謝の気持ちを含めて見送る大勢の市民の姿に感動した一男性の率直な感想が載っていました(10/30付)。 民生委員を務める家内は、自治体の職員と一緒に、15号台風の翌日から2週間にわたって館山公民館で被災者へのブルーシートやカップラーメンなどの生活物資の配付に四苦八苦しておりましたが、時折、訪れた大宮、習志野などの災害派遣部隊からねぎらいと励ましの言葉をかけられ、一同感激、疲れが吹き飛んでしまったとのこと。 一方、民生委員の会合(10/31)の場での一女性の発言、「自衛隊が張ったブルーシートはみ〜んな剥れて飛んでしまった」とか。誰も現場を見ていなかったのでその場は「し〜ん」としらけムード。数日後の房日紙への一女性の投稿(11/6付)、「自衛隊のシート張り作業はてきぱきとして丁寧。特に2階屋根のシート張り作業は神業!」。また台風で壊された建物の屋根を教材として、自衛隊がブルーシートの張り方の実地講習を行っている様子が紹介されていました(房日紙)。自分たちで研究・工夫して安全で確実・効率的な作業方法を会得したのです。  
時として**見えない発言・戯言**もありますが、**雑音に感わされることなく誇りと自信**をもって**頑張ってください**。大半の市民は見るべきところはちゃんと見ているのです!

## 支部活動

《10・11月活動予実績》	《12・1月活動予定》
10.4/5 館山航空基地開隊66周年記念行事(中止)	1.18(金) 館空会・支部役員合同交流会
10.10(木) 旧海軍予備学生慰霊祭(安房神社)	1月下旬 歴史研修支援(楨の会、佐野地区)
11.27(水) 館山航空基地殉職隊員慰霊祭	1.25(土) 支部役員会(コミセン)
11.30(土) 支部役員会(コミセン)	

## 木更津支部会員から台風被災のお見舞いを!

奇特の士は千葉県隊友会木更津支部正会員の高井三郎(みつお)氏で、台風15号の記録的な猛風により甚大な被害を被った当地域の窮状に鑑み、館山支部に対してお見舞いとして金一封のご寄贈がありました。今回の被害は館山に限らず千葉県全域におよび、木更津も決して例外ではないのですが、「貧者の一灯」として他所・他人の不幸を思い遣り・気遣う氏の高邁な誠心に感服致し、ご厚意を甘受して支部の基金財源として有効に使用させていただくことにしました。  
会員を代表して支部長から気持ちを込めたお礼状を差し上げておきました。 <支部長>

### <高井三郎氏のプロフィール>

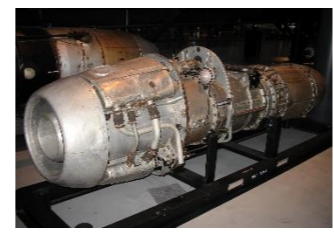
- 1934(昭和9年) 東京都生まれ 当年85歳
- 1952 陸自入隊(任期制隊員) 戦車大隊等勤務 中央大法学部卒業(通信教育課程)
- 1959 研鑽を続け幹部候補生課程合格、同修了 3尉任官 第9特科連隊、高射学校、幹部学校教官勤務等、指揮幕僚課程修了
- 1988(昭和63年) 定年退官 退官後も幹部学校等で戦術・軍事技術教官を続ける
- ※「第4次中東戦争・シナイ(著作)」ほか多くの著書、翻訳書を出版
- 日本安全保障・危機管理学会顧問、防衛装備工業会会員ほか多くの役職

## トピックス

第33回危険業務従事者叙勲(防衛功労)  
瑞宝双光章受章 上村 雅彦会員(海、21空群司令部)  
晴れのご受章を心から祝福申し上げます(支部会員一同)

## 新入会員紹介

10月期 竹林 穰会員(海、館空基)  
記島(きじま)達也会員(海、21空)  
海上自衛隊での勤務を全うされ隊友会への即日入会を歓迎致します。(支部会員一同)



<「ネ-20」ターボジェットエンジン>  
終戦時、米国に押収された数基の試作エンジンの1基が石川島播磨重工業・航空エンジン事業部に展示されている。

## 随想：幼児期に体験?した洪水氾濫水害

小・中学生の頃住んでいた東北の郷里を流れる「岩木川」は、霊峰・岩木山とともに津軽の象徴として吉幾三の演歌でも唄われている。普段水の流れる部分の川幅は100m程度で、増水の都度様変わりする中洲は子供らの格好の探検ごっこの場だった。岩木川には野球のグラウンドや畑で埋め尽くされた広大な河川敷を介して高い堤防が築かれ、兩岸の間隔が1km近くあったように思う。大雨が降っても河川敷が冠水することは滅多になく、こんな大げさな堤防を造る意味が理解できなかったが、ある年の雪解けの時節、増水により広大な河川敷が一面冠水し、さらに堤防の上端30センチ寸前まで迫ったことがあった。街中サイレンが鳴り響いたが、いかんせん津軽平野の中央部に位置するこの地には、避難できるような高台など見当たらないのである。幸い事なきを得たが、改めて堤防の意義を実感させられた。  
もともとこの地は河口まで数キロの下流域で、支川が合流する屈折の多い傾斜の緩やかな「氾濫危険流域」として、大正初期から重点的に河川の改修工事に力が注がれてきた場所だったのである。

### 幼児期に見舞われた洪水氾濫

ここからが本題で、日中戦争が始まった昭和12年秋、父の勤務の関係で茨木県の土浦町で生まれた。親から聞いているところでは、霞ヶ浦が氾濫して特借宿舎の一階が完全に冠水して二階の床寸前まで迫ったことがあったという。それ以外のことは全く分からない記憶もない。「霞ヶ浦水害史」を調べてみると、S13(1938)年6月、大雨洪水により霞ヶ浦に流入する利根川水系・桜川の堤防が決壊して土浦町が冠水し、最大水位3メートルを超え、4千500戸以上の家屋が流出・冠水したとある。時期的にもこの洪水氾濫に間違いはない。生れてまだ9箇月の乳飲み子では記憶が無いのも無理はない。両親・兄もすでに他界し、当時の面影を留めるのは冠水して汚れ色褪せたアルバムだけである。  
常総災害・復興支援ボランティアに参加して

数年前、常総地方の洪水氾濫災害に際して、千葉県隊友会が編成した復興支援ボランティアチームの一員として参加したことがある。被災現場での作業は、つい先日まで人々の仕事・生活が営まれていた場での屋内の泥出しや洗浄・消毒、廃棄物等の運搬などであった。押し寄せた濁流により一瞬にして仕事・生活が奪われ、人々の愛着・情が込み込んだ家財や生活用品類が災害ゴミ・廃棄物と化して道路や空き地の至る所に山積される情景を目の当たりにした。この悲しみ、絶望感、むなしさは経験した人々にしか実感できないと思う。  
先般の台風15号では館山もかつて経験したことがない風災に見舞われ、沢山の「災害ゴミ」が市内各所に集積されるという、かつてない光景を目の当たりにした。同じ災害ゴミでも「風災ゴミ」と「水災ゴミ」とでは、「種類・質(たち)?」が違うのである。冠水した布団や畳、テレビや冷蔵庫などの電気製品のほとんどが再生不能ということにとどまらず、「濁流・泥水」には、(目には見えないが)家庭や事業所等の浄化槽から溢れ出た汚物が混じっているのが普通であり、ボランティア作業を通じて改めて洪水氾濫災害の実態の一面に触れたような気がする。  
長い間身近に悲惨な災害がないと、他所で起こった災害も遠い地球の裏側の出来事にしか映らない。これが転じて「他所・他人に対する気遣い・思い遣りの気持ちが薄らぐ」ことだけは断じて避けたいと思う。また自分にできることは努めて協力(共助)したいと思っている。  
序(ついで)に

風の便りによると、郷里の岩木川の改修工事が今年度で当初の計画を完了すること。大正初期に始められ、膨大な国家予算と人、機材・資材を注ぎ込んだ河川改修工事が100年余にわたって営々と続けられてきたのである。災害の度に、やれ「人災だ」、「国・自治体は何をしている」が叫ばれ「補償要求」に落ち着くケースが多いが、公助・共助・自助は今に始まったことではないと思うのである。現在住んでいる館山の土地を求めた際、亡父が「少しでも(標高の)高い場所」に固執したのも、明治~昭和にかけて郷里・岩木川の「氾濫危険流域」で生まれ育ち、霞ヶ浦で洪水氾濫を体験した亡父の教訓、「自助努力」のたまものと思っている。  
<匿名希望会員(海)>

## 「桜花43乙型(特攻機)」に託した人々の思い(中)

### <前号から続く>

### ターボジェットエンジンの開発経緯と顛末

S19年中ごろ、戦時中続けられた日独技術交流の一環として、ドイツ空軍がすでに実戦化していたターボジェットエンジン2基と設計図を供与されたが、潜水艦で日本へ送る途中で米軍の対潜機に撃沈され一縷の望みが絶たれた。調査のため訪独した海軍技術士官の頭の中に残っていた幻の設計図を頼りに、劣悪な環境条件の中で手探りで試作が進められ、S20年春には地上でのテストランにまでこぎつけた。  
「ネ-20」と命名された初めての純国産ターボジェットエンジンが試作機「橘花(きっか)」に搭載(双発)され、終戦直前の8月7日に木更津航空基地の滑走路を離陸、11分間の軽荷重飛行テストで成功を収めたが、次いで行われる予定の重荷重飛行テストを待つことなく終戦を迎えた。  
ゼロに等しい状態から始めたターボジェットエンジンの開発が、極めて短期間でもって試験飛行にまでこぎ着け、一応の成功を収めたことは驚嘆すべきことであるが、戦後まとめられた関係者等の反省文書から、「桜花43乙型特攻機」の開発段階から作戦部門と技術部門との意思疎通がなく、このコンセプトに託したそれぞれの関係者の思いが乖離(かいり)したまま、作戦部独走の形で進められたことは残念なことであった。  
発射基地の配備・編成を探る

桜花43乙型機の「作戦運用」に関する公的な文書・記録資料は皆無であり、関係した人々の証言も僅少である。これから先のことは筆者の推測によるものであることをお断りしておきたい。  
関東から紀伊半島に至る太平洋沿岸沿いに計画された50基地について、実際にどの程度着工されたかは不詳であるが、地名から各基地の分布状況をマクロ的に調べてみると、比較的狭い範囲にいくつかの基地が集落状にまとまっていることが分かる。房総半島を例にとると、房総南部の下滝田、上滝田、平群など6箇所の基地が4~5キロ四方の範囲内に、また房総東部の基地も同様である。紀伊半島に至る三浦、伊豆、大井、伊勢、和歌山などの地域についても同じようなことが言える。  
このことから、計画された50箇所の基地が無作為に配備されたものではなく、集落状に配備されたいくつかの基地でもって一つの「基地群」(例えば「房総南部基地群、房総東部基地群」)を編成する意図があったものと考えるのが順当であろう。

この基地配備・編成に、桜花43乙型機の作戦運用を考える上での重要なキーワードがあると思うのである。 <次号に続く>  
<自称地域史探索マニア その26>